

Title	顎関節症患者の咬頭嵌合位に関する研究
Author(s)	高島, 史男
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33249">https://hdl.handle.net/11094/33249</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	たか 高	しま 島	ふみ 史	お 男
学位の種類	歯	学	博	士
学位記番号	第	5	5	1
学位授与の日付	昭和57年1月26日			
学位授与の要件	歯学研究科 歯学臨床系専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	顎関節症患者の咬頭嵌合位に関する研究			
論文審査委員	(主査) 教授	下総 高次		
	(副査) 教授	河村洋二郎	助教授 野首 孝祠	講師 和田 健

### 論 文 内 容 の 要 旨

各種下顎位のうち咬頭嵌合位は、下顎の機能的運動の終末位であり、咬頭嵌合位における咬合異常が、顎口腔領域の機能障害につながる可能性は大きい。下顎位は、顎関節、上下顎歯牙及び神経筋機構により決定されることから、下顎位の異常を知ることは、顎関節症の診断を確立していく上で、有力な手がかりとなるものと思われる。本研究は、顎関節症における機能異常を臨床的に把握する研究の一環として、正常者ならびに顎関節症患者の咬頭嵌合位を分析したものである。

被験者は、顎関節部に器質的变化を認めない顎関節症患者で、歯牙欠損が比較的少なく、歯牙の病的動揺を認めないものを選び、対照として、顎口腔領域に異常を認めない個性正常咬合者をあてた。

下顎の位置分析には、咬合器上で、下顎切歯切端部と両側顆頭球とで決定される面を計測基準平面とし、ストレンゲージを利用した精度0.05mmの記録装置を用いた。臨床上、咬頭嵌合位に相当するとみなしうる、以下の4下顎位を測定した。すなわち、被験者に安静位付近から静かに閉口を命じ、咬みしめずに、軽く歯牙接触した状態で最も安定していると感じる下顎位(Stable position, 以下St.P.と略す)と、そこからの最大咬みしめ位(Clenching position, 以下Cl.P.と略す)と、毎秒2回の頻度で、中等度の強さの習慣的閉口運動を行わせた時の、最初に歯牙接触した時の下顎位(Tapping position-initial contact, 以下Tap.P.(i)と略す)及び歯牙接触100msec後の下顎位(Tapping position-stable, 以下Tap.P.(s)と略す)の4下顎位である。そして、これらの4下顎位について各20回測定し、それらの分布幅及び相互の位置関係について分析を行った。

以上より下記の結果を得た。

測定した4下顎位の分布幅は、正常者群、顎関節症患者群ともに、Cl.P.が最も小さく、Tap.P.

(s)とSt. P.は、Cl. P.とほぼ同程度の分布幅を示した。Tap. P.(i)は、他の3下顎位に比して、分布幅が著しく大きかった。顎関節症患者群における4種の下顎位の分布幅は、正常者群のそれぞれに比して大きく、とりわけCl. P.及びTap. P.(s)では2倍程度大きかった。正常者群のSt. P., Cl. P. 及び Tap. P.(s)相互間の距離が小さく、3下顎位がほぼ一致していたのに対して、顎関節症患者におけるそれぞれの距離は、正常者群の場合の2～3倍大きく、3下顎位は明らかに異なった位置をとった。疼痛を有する患者では、Cl. P.がSt. P., Tap. P.(s)に対して、疼痛側に位置する症例が多かった。顎関節症患者群におけるTap. P.(i)とTap. P.(s)間の距離は、正常者群のそれに比して2倍程度大きく、閉口運動時に歯牙接触後下顎が大きく偏位した。左右の歯牙接触感覚が不均衡なものでは、下顎が接触感覚の強い側から弱い側へ偏位する症例が多かった。咬合治療を施したことによる症状改善後では、4下顎位の分布幅が正常者群のそれに近似するようになった。また、St. P., Cl. P., Tap. P.(s)の3下顎位は互いに近接し、Tap. P.(i)とTap. P.(s)間の距離も治療前に比して小さくなり、正常者群のそれに近似した値をとった。

以上の結果、咬頭嵌合位は、習慣的閉口位における歯牙接触状態の左右均衡が保たれており、咬みしめ時に顎偏位を伴わないことが望ましく、その様な咬頭嵌合位の確保が、顎関節症の改善につながることが明らかになった。

#### 論文の審査結果の要旨

本研究は、顎関節症患者の咬頭嵌合位について追求し、個性正常咬合者を対照として比較検討したものである。なお、咬頭嵌合位の測定分析には、次の4下顎位について行った。被検者が咬みしめたりせず、無理なく安定していると感じる歯牙接触位(St. P.)と、そこから最大咬みしめを行わせた時の下顎位(Cl. P.)。習慣的閉口運動時の最初の歯牙接触位(Tap. P.(i))と、接触100 m sec後の安定した歯牙接触位(Tap. P.(s))。

その結果、個性正常咬合者については、St. P., Cl. P., Tap. P.(s)の3下顎位の分布幅が小さく、3下顎位がほぼ一致していることが明らかになった。

これに対して、顎関節症患者では、上記3下顎位の安定性並びに位置関係に異常性がみとめられ、それらは、咬合治療を施したことによる症状の改善後に、正常者の所見と近似するようになることが判明した。

以上のことは、顎関節症の正しい診断と治療法の確立をめざす上で、重要な知見であり、本研究は価値ある業績であると認める。よって本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。